

極覧

社研だより
第 98 号

令和 7 年 3 月

発行 京都市小学校

教育研究会社会科部会

責任者 京都市小学校

社会科教育研究会

當 麻 章 英

今年度を振り返って

京都市小学校社会科教育研究会

副会長 森 美知子

令和 8 年度の全国小学校社会科教育研究協議会京都大会を 2 年後に控え、様々な準備をしていくための重要な 1 年となった令和 6 年度。研究部からは、「#子どもが調べ考える社会科学習 ～よりよい問題解決を見据え 自他に問い続けていく姿の育成を目指して～」という研究主題が出されました。これは、これまで京都社研が大切にしてきた、子どもが主体的に進める社会科学習をさらに進め、子ども自身が課題を見出し、見通しをもって計画的に調べたり他者と議論して考えを深めたりして、学び進めていく社会科学習を目指しています。各学年部では、この研究主題を受け、様々な工夫を凝らし、授業実践を進めてきました。

私は今年度、4 年部会の授業に参加させていただきました。その中で、研究部が提案する主体的な学びの実現に向けて、「調べる学習の充実」が実践されていました。自分の課題を解決するために、何を調べればいいのか、どうやって調べるのか、どれくらいの時間が必要なのかなどを、子どもが自分で考え計画を立てて学習を進めます。子ども達は、1 時間の学習のほとんどの時間を教科書や資料集、タブレットなどを使って、集中して調べ学習に取り組んでいました。そのような子どもの姿の裏側には、教師の仕掛けが隠されています。子どもが使いやすいような資料を準備したり、前日までの一人一人の学びを見取って声掛けをしたりして、子どもの学びを導いていたのです。また、一人で学習する場面だけでなく、グループで学習する場面なども取り入れ、子ども同士が学び合い、学びを深めるような工夫も取り入れられていました。今後は、子ども自身が調べ深める視点を見出したり、新たな調べの視点を見出したりすることができるように、学習活動の工夫や教師の支援の在り方などを探り、研究部の提案する「見通しの充実」をさらに進め、「子どもが調べ考える社会科学習」を目指してほしいと思います。

近年、若い研究会員の先生方も増え、各学年部会の授業実践だけでなく、授業づくりについてなどの勉強会も盛んに行われています。夏の「一日社研」にも多くの研究会員の参加があり、京都社研の活動がどんどん活性化している様子が見られ、大変うれしく思っています。また、極覧会の先輩の先生方からも、お話を聞かせていただいたり、京都大会に向けてのアドバイスをいただいたりと、様々な面でご支援をいただいております。来年度は京都大会前年度となります。京都大会を実際に運営していくための、大会実行委員会もまもなく発足いたします。さらに、京都大会の【公式】「ロゴマーク」も決まり、大会への意識も高まってきました。よりよい問題解決を見据え、自他に問いかけていく子どもの姿の実現に向けて、3つの会場校を支援していくためには、より多くの研究会員と極覧会の諸先輩方のお力が必要です。研究会活動を盛り上げ、極覧会の先生方のお力を借りながら、社会科教育研究会会員が一丸となって、全小社研京都大会に向け進んでいきますよう、来年度も皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

3年部会

「地域の人々の営みから学びを深め、 自分と地域とのつながりを考える子ども」

3年部会では、地域の様子や人々の姿を通して学ぶことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにすることをテーマに、今年度の研究を進めてきた。また、研究構想の具現化のため、3年生という子どもたちの実態に合わせながら、「子どもが調べ考える社会科学習」の実現を目指してきた。

このような考えのもと学年部会を行い、部員とともに授業づくりを行ってきた。そして、2つの単元を通して授業研究会を行い、研究主題に迫るとともに、研鑽を重ねることができた。

以下、その一端を報告する。

本年度の授業実践

- ①桂東小学校 清水 一希 (11月)
「京都市の様子とくらしのうつりかわり」
- ②山階南小学校 鯨本 零二 (2月)
「火事をふせぐ」

実践① 「京都市の様子とくらしのうつりかわり」

単元の学習問題

なぜ京都市の中心は、昔とくらべてまちが広がったのだろう。

「京都市の様子とくらしのうつりかわり」では、時代に伴う変化の少ない京北地域と、変化の多い京都市中心部の地図を比べ、学習問題をつくる活動を設定した。

「昔とあまり変わらないところもあるよ。特に、京北地域は変化が少ないね。」や、「それに比べて、京都市の中心部は、昔よりこんなにも街の範囲が広がっていて、様子が変わっているのがわかるよ。」などの気付きから、単元の学習問題を設定した。



単元の学習問題に対する予想を立て、それらを問い化する活動を行った。出てきた予想を分類することで、「調べる学習」につながる見通しをもつことができたと考えた。

分類よって出てきた視点は、「人口」「土地」「道具」「交通」「建物」であったため、単元の学習問題の設定や提示資料、指導者の問掛け等が適切であったと感じている。

実践② 「火事をふせぐ」

単元の学習問題

なぜ、京都市では全焼する家が少ないのだろう。

「火事をふせぐ」では、「なぜ、京都市では全焼する家が少ないのだろう。」という単元の学習問題について調べる学習を行った。学習計画をもとに、単元の終末で予定している活動に向けて、協働的に調べる姿が見られた。

消防士の活動や関係機関の働き、火事を防ぐ設備や人々の取組等について、個に応じた興味や考えに沿って調べる学習を展開することができた。調べる過程においては、主体性を核とした調べる時間を設定し、個に応じた支援によって、調べる学習の質を高めることを意識して、取り組んだ。

両単元とも、子どもの問題意識を高め、子どもが主体的に取り組める単元の学習問題を設定することができた。そして、問いについて予想し、問い化を図ることで、調べる学習の充実にもつながった。

以上の実践を通して、3年部会のテーマである「地域の人々の営みから学びを深め、自分と地域とのつながりを考える」ということに迫ることができた。次年度も引き続き、「子どもが調べ考える社会科学習」のよりよい姿に迫ることができるよう、自他に問い続けていく姿の育成を目指して研究を進めていきたい。

〈文責 紫野小 上田 亮介〉

4年部会

「自分たちの暮らしを支える人々のおもいや願いについて
学びを深めることで、地域社会に対する誇りと愛情をもち、
地域社会と自分とのつながりを考える子ども」

本年度4年部会では、研究主題にあるように「子どもが調べ考える社会科学習」とするためにはどのような単元構成とすればよいのか。どのような子どもたちの姿が調べ進めているのかということ話し合いながら進めていった。以下、実際の実践について詳しく述べる。

壹の矢：学習問題の設定

【「用水のけんせつ」～琵琶湖疏水～】では、単元の始めに琵琶湖疏水はどのような所なのか見学をした。そして疏水を建設した当時の京都の人口の移り変わりの資料を提示した。子どもたちは、人口が減ってしまい寂しくなった京都の町が疏水建設の後に人口が増えたことを捉えた。また、人口が増えたということは、寂しかった町が活気づいたのでは考えていた。琵琶湖疏水って凄いんだなという認識をもった後に、疏水建設に際して京都・滋賀・大阪の人が反対していたという事実に出合わせることで、子どもたちの問題意識を醸成させた。そうして、「琵琶湖疏水はどうやって作られ、京都のまちはどう変わったのだろうか。」という充実した見通しにつながる学習問題が設定できた。

貳の矢：見通しの充実

「用水のけんせつ」～琵琶湖疏水～では、学習問題に対してそれぞれが考えた予想をロイロノートを使って共有し、仲間分けしながら名前を付けていった。その名前をもとに問いをつくった。そうすることで、対話を通して多様な考え方に触れながら見通しをもつことが出来た。



参の矢：調べる学習の充実

それぞれ自分の調べたい『問い』について副読本・地図帳・GIGA端末・拡大した資料などを使って調べた。学習の始めに今日はどの問いを調べるのか共有することで、同じ問いを調べ

る同士が近くで調べるようにした。そうすることで、資料を見ながら「これどういうことだろう。」「こんなの見つけたよ。」など、自然に対話しながら調べていた。



黒板を子どもたちに開放して、新たな疑問を共有出来るようにすることで、「それ、この資料見れば分かったよ。」「確かにどういうことなんだらう。」と、互いに考えを交流しながら調べ進めることができた。

来年度へ向けて

調べる時間をまとめて取ることで子どもたちの状況を把握して多くの支援を行い、考えを引き出すことが出来た。しかし、知識・技能面の指導が不十分であるように感じられた。例えば、「自然災害から暮らしを守る」では、学習指導要領に「時間の経過に沿って年表などに整理したり関係機関相互の協力関係を図表などにまとめたりする技能などを身に付けるようにすることが大切である。」とあるが、調べたことを図表にまとめている子どももいたが、調べて分かったことを羅列しただけで終わってしまった子どももいた。

次年度は個人で追究する時間を大切にしながら、付けるべき力は一斉指導を行うなど、知識・技能面についてもしっかりと子どもたちに身に付けられるように単元を構成していきたいと考える。

本年度の授業実践

- 11月19日 「用水のけんせつ～琵琶湖疏水～」
久世西小学校 兼山 柚紀教諭
- 11月22日 「自然災害から暮らしを守る」
大塚小学校 勝部 順也教諭
- 2月19日 「国際交流のさかんな舞鶴市」
川岡東小学校 岩瀬 亮太教諭

〈文責 久世西小 仙波 俊輔〉

5年部会

「社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども」

本年度の授業実践

- 「情報を生かす産業」
紫野小学校 林 奈央人教諭
鷹峯小学校 坂元 翼教諭
- 「自然災害を防ぐ」
美豆小学校 大本 勇介教諭
葵小学校 松本 雪穂教諭（2月末予定）

紫野小 林 奈央人教諭の実践について

林教諭の授業実践では、**「壺の矢：学習問題の設定」**、**「式の矢：見通しの充実」**として、子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する工夫、予想から見通しを持たせる工夫を図った。本単元【情報をいかす産業】において、まず日本のコンビニエンスストアが称賛されている外国の新聞記事を紹介した。そして外国と日本のコンビニエンスストアの様子を提示した。また、日本におけるコンビニエンスストアの利用率を提示し、なぜ利用率が高いのか、その理由を考えた。いつでもたくさんの品揃えであること、利用率が高いことをもとに、「なぜ、日本のコンビニエンスストアは、商品の品ぞろえがよくて、様々なサービスを受けることができるのだろう」という、学習問題を設定できた。子どもたちからの「なぜ？」といった問題意識を大切に学習問題となった。また、見通しの充実を図るために、言葉だけの予想ではなく、関係図を用いることにより、調べる視点の明確化を図った。学習問題の予想では、消費者・本部・配送・様々なサービス（他産業）とコンビニエンスストアとの関係について考え、それらを調べれば、学習問題の解決につながるといった見通しをもつことができた。また予想が次々と挙げられ、問い化する流れへと導くことができた。このように、子どもたち自らが学習の主体者となり、主体的に取り組む実践となった。



れぞれの関係がどのようになっているのか、問題意識を持ちながら進めることができた。また、子どもたちが自ら資料を選び、それらの資料を使える工夫として、調べたことを共通のワークシートに書きこんだり、共有のボードにまとめたりした。その結果、子どもたち同士で学習問題の解決に必要な事実を話し合ったり、足りていない情報を伝え合ったりすることで自己調整をしながら調べを進めていく姿が見られた。これらの調べの過程からまとめる過程では、一人一人が作成した関係図を持ち寄り、学習問題の答えについて話し合った。みんなで、学習問題の答えを関係図にまとめることを通して、情報の活用によりコンビニエンスストアが発展してきたこと、そして、国民生活の利便性を大きく向上させてきたことといった社会的事象の概念理解を図ることができた。



美豆小 大本 勇介教諭の実践について

大本教諭の授業実践では、**「壺の矢：学習問題の設定」**、子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する工夫を図った。本単元【自然災害を防ぐ】では、日本で起きた過去10年間の自然災害を白地図にドットでまとめた資料を紹介し、日本では多くの自然災害が起きていることを確認した。それから災害が起きやすい国のランキング4位と災害に強い国のランキング13位を提示した。災害が多く起こるのに災害に強いと認められていることへの思考のズレから問題意識を持ち、「なぜ様々な災害が多く起こるのに、災害に強いと認められているのだろうか」という学習問題を設定することができた。

葵小 松本 雪穂教諭の実践について

松本教諭の実践では、**「参の矢：調べる学習の充実」**、**「壺の環：系統だてて育む力の整理」**を目指し、単元「自然災害を防ぐ」のまとめる過程で授業実践を行う予定をしている。この実践では、子どもたちが調べた事実をもとに社会的事象の意味について考える場面を設定すること、項目やカテゴリー等に整理してまとめることについて重点をおいた授業づくりを行う。

〈文責 紫野小 林 奈央人〉

鷹峯小 坂元 翼教諭の実践について

坂元教諭の授業実践では、**「参の矢：調べる学習の充実」**として、子どもたちが自ら資料を選び、使える環境づくりの工夫を図った。本単元【情報をいかす産業】において、調べたことを関係図にまとめながら調べる活動を行った。常に、子どもたちは、コンビニエンスストアとそ

6年部会

「社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから
学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども」

6年部会では、研究部の主題設定を基に、政治・歴史・国際社会について学んだことを自分とつなげて考える社会科授業を目指していった。また、教員としても学び続ける存在であるために、ニーズに合わせた勉強会を設定していった。7月より6年部会を設定し、毎月1回以上のペースで実施ができた。部会の際は新たに入会された先生方の授業作り・学級経営に関する相談会を実施し、次単元の教材検討や同和単元の指導法などを気さくに話し合えた。このような積み重ねの中で、授業実践を行っていった。

本年度の授業実践

- ・11月1日 「町人の文化と新しい学問」
京都京北小中学校 佐野 陽一教諭
- ・11月27日 「明治の国づくりを進めた人々」
洛央小学校 森川 孝教諭
- ・2月3日 「新しい日本、平和な日本へ」
葛野小学校 田中 百恵教諭

◎令和6年11月1日（金）

京都京北小中学校 佐野 陽一教諭

単元「町人の文化と新しい学問」に関して

単元の学習問題を「江戸時代後半にできた文化や学問と、平安時代・室町時代の文化や学問を比べてみると、どのようなことが見えてくるだろうか。」とし、江戸時代だけではなく、これまでの時代の文化や学問と比較・関連付けて調べていった。グループで協働的に調べることで、お互いが補いあいながら考え、調べる様子も見られた。GIGA端末やグループごとにホワイトボードも利用し、調べる活動を通して新たに生まれた疑問を子どもたち同士で交流しあいながら答えを見つけていく姿が見られた。この単元の後、これまで培った調べる力を利用して、一人で調べ進める活動にも発展させていくことができた。



◎令和6年11月27日（水）

洛央小学校 森川 孝 教諭

単元「明治の国づくりを進めた人々」に関して

単元の導入にて、ペリー来航や外国との関係

を調べることで、「明治政府がどのような国を目指していたのか。」という学習問題を設定した。ここから「経済力向上」「外国に負けない国」「軍事力向上」の3つの予想が生まれ、子どもたち一人一人が答えを見つけようと調べ活動を進められた。今回、単元の5/7時に学習問題に立ち返ることで、成果が表れた政策と、うまくいかなかったことを見つめ直した。子どもたちは調べたことを振り返りながら交流を進め、次にどんな政策を進めたのかの問いをもち、次時への学習への見通しをもつことができた。



◎令和7年2月3日（月）

葛野小学校 田中 百恵教諭

単元「新しい日本、平和な日本へ」に関して

本単元は大単元「日本の歴史」の最終でもあるため、単元構成を2つに分け、第1の単元の学習問題を「戦後ぼろぼろになった日本は、どのようなことをして復興していったのだろうか。」として、戦後の日本の復興を「政治・政策」「外国との関係」「産業の発展」という3つの予想から問い化して個々で調べ学習を進めた。6/9時においては、調べてきたことを交流した後、「どんな日本に変わったのか。」と問いかけることで、短い言葉で変容を捉えさせる活動を試みた。子どもたちは事実の整理ができたことで、現状と課題を見つめ、2つ目の問い「1964年以降、どのような国づくりを進めていけばよいのだろうか。」につなげられた。



6年の実践を通して、子どもたち一人一人が問いをもち、それぞれが調べ進める単元構成を目指していった。特に問いの設定や調べる場面では一定の成果をあげることができた。一方で、調べたことをいかにしてまとめていくのかについては明確な答えが出ていない。事実の羅列に終わらず、子どもたち一人一人の考えが表出したり、より概念化した言葉で表現したりすることができる授業設計を工夫していきたい。

〈文責 洛央小 石原 一繁〉

研究実践で変容する 子どもの姿

「#子どもが調べ考える社会科学習～よりよい問題解決を見据え 自他に問い続けていく姿の育成を目指して～」の研究主題の実現に向けて示した5つの方策の充実を目指し、各学年部で様々な実践が行われました。各実践の様子を見聞きする中で、子どもたちがこれまで以上に主体的に学習に向かう姿が随所で見られるようになったと感じています。

今年度、私も社会科の授業をする機会がありました。子どもたちの「？」をどう醸成するか、見出した問題の解決の見通しをどのようにもたせるか、どのように子どもが調べる学習を展開していくか、その中で教師はどう子どもと関わるかなど、京都社研の研究の視点を軸においた学習を構想しました。

社会科の学習の面白さをまだ十分わかっていない子どもたちでしたが、見出した学習問題を追究するにつれ、子どもたちの問題を解決したい、もっと調べたい、という思いが強くなっているのを肌で感じました。個人で始めた調べ学習は、自然と友達と協働して進める学習へと変わり、時には個人で見通しをもちながら調べ、時には学習問題について話し合いながら進めるようになりました。単元末には学習問題について自分たちが調べ考えた内容について、議論する姿がありました。



実践を通じ、子どもたち自らが調べたい、考えたいと思い、授業を待ち遠しく思っている、考えがどんどん深まっていく、そんな様子を見ると、私たちが今取り組んでいる研究は本当に意義があることだと確信します。子どもを研究の中心に据えて考え、子どものよりよい成長を期すべく、研究のよりよい充実に向け、京都社研でその充実を目指し、さらに邁進していきたいと思えます。

〈文責 研究部 部長 加藤 俊介〉

伝統技術にふれた「子ども体験教室」 京扇子を作ってみよう！

今年度の子ども体験教室「京扇子を作ってみよう！～プロの方々に教えてもらって、自分のオリジナル扇子を作ってみよう～」は、令和6年11月30日（土）に京都市総合教育センター4Fの永松ホールで実施しました。今年度も講師として京都扇子団扇商工協同組合青年部の皆さん6名をお招きし、ご指導をいただきました。

右の画像は、子ども達が自分の折地に扇骨を差し込むようとしている時の様子です。折地に扇骨を差し込む前に地吹きという工程を行います。地吹きの折地への空気入れ、そこから扇骨を上手に差し込むのは簡単そうで難しく、地道な作業に苦戦する子ども達の姿も見られました。困っている子には職人さんが丁寧に声掛けをしてくださいました。職人さんが一瞬で完成させる姿に、これまで培ってきた技術に驚きを示す様子が見られました。



また右の画像は、扇子の完成を待つ間、職人さんから京扇子についての歴史や由来を聞く様子です。自分達で体験したからこそ、子ども達はもっと伝統的な扇子について知りたいと、学びを深める姿が見られました。最後の職人さんへの質問時間には、扇子作りの歴史について多く職人さんに聞く姿が見られました。伝統文化に触れることができました。



枠内は、子ども達の感想から抜粋したものです。

- 扇子は日本にしかないと思っていたけれど、いろいろと広がって使って使われ、いろいろな歴史があることが分かりました。
- プロの方々は何個も作っておられ、すごいなと思いました。京扇子が日本の京都で生まれたことを知れてよかったです。
- 扇子が租税の値札から生まれたと知ってびっくりしました。

京都の伝統産業に触れることで、子ども達が暮らす京都という郷土やその歴史を大切に感じる一助となることを願っています。

〈文責 実践講座委員 佐々木翔史〉